
明日を願って

未知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日を願って

【Nコード】

N8055Z

【作者名】

未知

【あらすじ】

冬休み、青子と新一は快斗と蘭が一緒にいるところを見てしまった。

そして、元旦の日に聞いてしまった同部活の親友からの残酷な言葉、

さらに快斗の本心を聞いた青子は快斗への想いを断ち切ってしまう……。

青子がとった行動は、

―転校―

その頃、新一は蘭への想いに疑問を抱き始めていた。

―俺は本当に蘭のことが好きなのか・・・？―

その日から起こった彼らの擦れ違い。

ついに、

親友・幼馴染の関係すら壊れていく・・・。

それから2ヵ月後、四校同時合宿することになった新一や快斗たちの高校。

しかし、そこで青子と再開すること。

けれど、久しぶりに会った青子は変わってしまっていて・・・？

「絶対なんてない。人は時が経てば変わるものよ」

「もう、元には戻れないのかな・・・」

※CPは原作通り

※訳あって題名とあらすじを変えました。もと『どんなに願っても』です。

それと、陰口などのシーンもあるので残酷な描写ありにしました。

プロローグ

「ねえ・・・どうしてよ・・・」

少女は涙を堪えながら呟いた・・・

「快斗・・・蘭ちゃん・・・」

・
「相手が蘭ちゃんなら・・・絶対青子なんか敵うはずがない・・・」

堪えていた雫は少女の瞳から零れ落ち、手に持っていた枕の上へと落ちていく。

暫くすると、少女は何かを決意した顔つきになった。

それが彼の幸せに繋がるのならば

自分が幸せでなくても・・・

彼が幸せであるのならば・・・

私はそれでいい

もう、諦めよう・
・
・

たとえ、どんなに願っても・
・

叶わぬ夢

私たちは、ただの幼馴染でしかないのだから・・・

快斗
・
・
・

「私は貴方が大好きでした・・・」

日常という名の痴話喧嘩

i n 江古田高校

ゝ江古田高校 2－B ゝ

「待ちなさい!!」

「誰が待つかよ!アホ子!!」

「何ですってー!!?このバ快斗!!」

「あんだと!?!お子様アホ子!!」

「何よー!!」

「あゝあ……。また始まった……」

「よくやりますよ。ほんと毎日毎日……」

「飽きないのかしら?あの二人」

上から順に桃井恵子・白馬探・小泉赤子。

三人の目の前にいるのは、モップを振り回しながら一人の少年を追いかける少女・中森青子とその青子の幼馴染である黒羽快斗の二名。

授業中に騒ぎ出し、追いかけてくる二人をやりだす迷惑極まりない行動を毎日行っている二人。

クラスメートから見たら痴話喧嘩にしか見えないのだが、本人たちは否定している。

しかも、このクラス内・・・いや、学校中でこの喧嘩を止められる人はまずいないだろう。

教師たちが抜き打ちで名指ししても、1秒後には答えが返ってくる。

しかも全て正解・・・

いつ黒板を見てるのか？

それがクラスメートたちの疑問でもある。

つまり、教師たちですら止められない・・・。

クラスメートたちは止めようという気がないため、止める者は誰一人としていない。

だから毎日2－Bは授業崩壊している・・・

「あと10分は止まらないでしょう・・・」

「同感だわ」

そう言い、勝手に持ち込んできた事件の調書を読み込む元祖高校生探偵で、警視總監の父を持つ白馬探と、赤魔術の正当なる後継者であり100人いたら100人とも振り返る程の美貌の持ち主である魔女・小泉赤子。

事件が起こり、呼び出しをくれば授業中であっても抜けて行く探。

そして、以外にも早退が多く、授業中はいろいろな本を読んでいる赤子。

ある意味こちらも問題児である。

『2－Bは問題児の集まり』とまで言われてしまっている。

実際、このクラスには早弁をしたり、授業を聞いているフリして実は寝ていたりする人も多いため、間違いではない。

しかし、一番の原因はこの四人であろう・・・

でも、先日の中間テストでは、1位⇒快斗&探、3位⇒青子&赤子と、素晴らしい頭脳の持ち主でもある。

さらに、四人が四人ともタイプは違えど美男・美女なため何も言えない（笑）

「別にいいじゃねーか！！！！」

「よくないわよ！！！！」

「ハ
ア
・
・
・
」

そんなお決まりとなった日常という名の痴話喧嘩。

これもこれで楽しいから好きなのだ。

でも・・・

これからも変わらず続いていく・・・

そう思っていたのは私^{青子}だけですか・・・？

日常という名の痴話喧嘩

i n 帝丹高校

〔 帝丹高校 2－B 〕

江古田高校2－Bの快斗と青子が壮絶な追いかけっこを繰り広げているのと同時刻、

帝丹の名物カップルも痴話喧嘩を繰り広げていた。

「ハア？何でそーなるんだよ」

「だって・・・もういい！今日の夕飯はレーズンメインにするんだから！！」

「ゲッ・・・それだけはマジ勘弁・・・」

「おーおー！さすが夫婦だこと」

「「夫婦じゃねえ（ない）！！幼馴染だ（よ）！！」」

「さすが息ピッタリ!!」

「園子!」

いつまでも経っても夫婦ではなく幼馴染だと主張する帝丹名物カ
ップルの二人。

『平成のシャーロックホームズ』『日本警察の救世主』の肩書き
を持つ東の高校生探偵・工藤新一と高校生空手関東大会優勝者・毛
利蘭

どちらの両親もよくTVに出る程の有名人である美男・美女

そして、二人をよくからかっているのは蘭の大親友であり、日本有数のお金持ち、鈴木財閥のご令嬢である鈴木園子。

園子はお嬢様なのだが・・・

新一に、『とてもお嬢様には見えない』と言われている。

それは、お嬢様に多い高飛車な性格ではなく、サバサバしてい

て友だち想いのお人好しの性格だからかもしれない・・・

でも、授業中に騒ぎ出し、追いかけてつこを始める快斗と青子よりは断然いい。

新一は寝ているが、静かだし・・・

蘭はちゃんと真面目に授業を受けているのだから・・・

そんな帝丹高校の名物にまでなっている日常という名の痴話喧嘩。

これからも変わらないと・・・

誰もが思っていたのに・・・

貴方たちの日常は、

いったいどこへいったのでしょうか・・・？

日常という名の痴話喧嘩

i n 帝丹高校（後書き）

最後のは園子sideです。

目撃したのは(前書き)

今回は青子sideです。

目撃したのは

「恵子く！おはよう！！」

「おはよう、青子！」

やっと冬休みに入った今日、12月23日・天皇誕生日の日

33

そして、今日は前から恵子と約束していたshoppingの日！

行き先はレイクタウン！

ここ最近では期末テストや全国模試などで忙しく、あまり遊びや買い物をする時間がなかったのだ。

「でも買い物なんて久しぶりだよ」

「そうだね」

それから・・・

お昼を食べたりお店を回ったり・・・

約1ヶ月振りのshoppingを楽しんだ恵子と青子

時が経つのは早く、あっという間に6時をまわっていた。

「え？もうこんな時間!？」

「時間経つの早いよねー」

「青子ー」

「何？恵子」

「私トイレ行ってくるね」

「じゃあ私はここで待ってるよ」

「分かったー」

恵子がトイレに行った後、ベンチに座りながらペットボトルのお茶を飲んでいた青子。

ふと遠くを見て・・・驚いた。

「あれ？新一君と蘭ちゃん？」

向かいの雑貨屋のところにいた1組の男女をみて呟く。

声をかけようとして・・・止めた。

(違う!!あの人は新一君じゃない・・・)

あの見慣れた後ろ姿は・
・
・

(あれは・・・快斗だ・・・)

見間違えるはずない・・・

その男女が・・・

新一と蘭ではなく、快斗と蘭であることに気づいてしまったから・・・

(どうして・・・快斗と蘭ちゃんが・・・)

「どうしたの？青子・・・」

「あ、恵子。何でもないよ」

また買い物をして、自宅に帰ったのは8時過ぎだった・・・

目撃したのは（後書き）

ほんとは12月23日に投稿したかったのですが・・・

忙しくて出来ませんでした。

すみません・・・

青子の答（前書き）

青子
s i d e

青子の答

(何で・・・・・・・・)

家に帰っても、あの光景が頭から離れずにいた・・・・。

(快斗・・・・・・・・すごく楽しそうだった・・・・蘭ちゃんも・・・・・・・・)

（快斗の好きな人って・・・蘭ちゃんなのかな・・・）

知っていた

快斗に好きな人がいることを・・・

それを知ったのは10月の上旬。

快斗と後輩である一年生の子が一緒に居るところをたまたま目撃したからだった・・・

よく見ると、その後輩の子は一学年の中で1・2を争うほどの美女であり、青子はすぐに告白だって気づいた。

本当は聞いてはいけないと思い、立ち去るつもりだったが、快斗の返事が気になってしまい、いけないと思いながらも隠れて全て聞いてしまったのだ。

案の定、その子は快斗に告白していた。

しかし・・・

快斗の返事は『嬉しいけど・・・ゴメン。俺、好きな奴がいるんだ』だった・・・

その答えに青子は固まってしまった。

（もう、快斗の隣にはいれないのかな・・・）

そんな思いがよぎる。

快斗がモテるのは青子も知っていた。

快斗に告白した子を何人も知ってるからだ。

でも、告白した人全員がダメだったと言っていた。

青子は何故、快斗が断るのか不思議でたまらなかった。

それと同時に嬉しかった・・・

快斗の隣にいれることが・・・

でもその日に知ってしまった

快斗が断る理由^{わけ}を・・・

自分が快斗のことが好きだと自覚したのは昨年の夏

恵子やクラスメートたちと話しているときだった

今思えば・・・

何であの時自分も恵子についていかなかったのだろうと後悔している

そうしたら・・・

目撃しなくてすんだのに・・・

「でも・・・」

「ねえ・・・どうしてよ・・・」

少女は涙を堪えながら呟いた・・・

「快斗・・・蘭ちゃん・・・」

「相手が蘭ちゃんなら・・・絶対青子なんか敵うはずがない・・・

」

堪えていた雫は少女の瞳から零れ落ち、手に持っていた枕の上へと落ちていく。

暫くすると、少女は何かを決意した顔つきになった。

それが彼の幸せに繋がるのならば

自分が幸せでなくても・・・

彼が幸せであるのならば・・・

私はそれでいい

もう、諦めよう・・・

たとえば、どんなに願っても・・・

叶わぬ夢

私たちは、ただの幼馴染でしかないのだから・
・
・
・

（何で見ちゃったんだろうね・・・ほんと・・・）

青子の答（後書き）

なぜ、快斗と蘭が一緒にいたのかは後に分かります。

明後日の予定（前書き）

<>は、メールの本文とと思ってください。

青子sideです。

明後日の予定



「あれ？メール・・・誰かな・・・!!」

メールの送り主は蘭・・・

＜明後日、新一の家でクリスマスパーティーやることになった
んだけど、青子ちゃん来れる？＞

そう書かれていた。

「・・・クリスマスパーティーかあ・・・」

＜ゴメン。明後日はちょっと用事があるんだ。せっかく誘ってくれたのに本当にゴメン！！＞

でも、そのクリスマスパーティー誰とやる予定なの？＞

メールを送ってから1分も経たない内に返信がきた。

＜そうなんだ・・・。残念だね。

えっと・・・新一と園子・服部君・和葉ちゃん・快斗君・白馬
君・私の七名だよ＞

そっか・
・
・
・
・

（良かった。蘭ちゃんに新一君・和葉ちゃん・服部君・白馬君・
園子ちゃん・それに快斗・……。皆鋭いからね・。・。）

(もう少し・・・。)

(今は皆の前で笑える自信がナイから・・・。)

クリスマスパーティー in 工藤邸（前書き）

※皆は工藤邸に泊まるつもりでパーティーしています。

クリスマスパーティー in 工藤邸

～工藤邸～

「やっほー！」

「あ！園子！！」

「やっと来たな」

上から園子・蘭・新一 今日12月25日はクリスマス！！

蘭と園子により企画されたクリスマスパーティーの日でもある。

「え？もう皆集まってんの！？」

「当たり前よー。これから皆で飾りつけとかするんだから」

「園子ちゃんも来たし、ほな準備始めよか！！」

「せやな」

「だな」

「じゃあ、ケーキ作りとかは蘭・和葉ちゃん・園子に任して、俺たちは飾りつけでもしようぜ」

「ちょ、ちょっと待って!!」

「あ? 何だよ園子」

「青子ちゃんは?」

「青子ちゃんなら何か用事あって来れないって……。一昨日メーブルあったんだ」

「・・・そっか。でも用事って何かしら?」

「さあ・・・」

「とりあえず、準備しようぜ!!」

「せやね」

「そうだね・・・」

「・・・そうね」

それから、飾りつけやケーキ作りなどが終わったのは、6時頃だった。

「よし！！それじゃあ始めるわよー！！！」

それからドンチャン騒ぎ。

皆、青子のことを言うことはなかった。

あれから
・
・
・
・
・

快斗がマジックショーをやり、

それから、新一・平次・探・快斗で最近起こった事件について語り合い・・・

蘭・和葉・園子は恋バナで盛り上がっていた・・・

そして一段落ついたのが11時頃。

それから風呂に入り、夜空を皆で見た後、

蘭・和葉・園子で一部屋、快斗・平次・探で一部屋、新一は一人で一部屋で眠りについた

クリスマスパーティー in 工藤邸（後書き）

クリスマスパーティーなのに、あまり詳しくなくてすみません・・・

読んでくださった方、ありがとうございます。

三日前の出来事（前書き）

昨日投稿できなくてすみませんでした。

今回は新 side です。

三日前の出来事

p.
m
1
..
0
0

新一はなかなか寝つけず、起きていた。

(・・・寝れねえ・・・)

ふと思い出したのは三日前の出来事だった。

三日前の12月23日・天皇誕生日の日。

新一は快斗と蘭が一緒に歩いているところを目撃してしまったのだ。

青子ちゃんの間違いかとも思ったが、毎日見てきた幼馴染を間違えるはずないし、どこからどう見ても蘭にしか見えなかった。

ただその日は目暮警部に呼ばれていたため声はかけずにそのまま通り過ぎたのだった・・・

（あれ・・・何だったんだろうな・・・）

あれからもう三日も経っていた。

た・・・。いつもなら、すぐに聞くのだが、今回はその気にはなれずにい

（気にはなるけど・・・今、言ったら何かが終わってしまう・・・
そんな気がしてならねえんだよな・・・。）

結局、それから睡魔が襲い、新一は寝てしまった。

—俺は・・・本当に、蘭のことが好きなのか・・・？—

一年が終わるとき Ⅰ大晦日Ⅰ（前書き）

昨日更新したかったのですが、出来ませんでした・・・。

ほんとにすみません。

一年が終わるとき ー大晦日ー

今年が終わるときがやってきた。

新一の家には、新一・蘭・平次・和葉がいた。

「ねえ！ 新一」

「ん？ 何だよ」

「快斗君と青子ちゃん・園子呼ばない？」

「何で？」

「だってー。皆でいたほうが楽しいし、青子ちゃんにも会いたいもん・・・」

「ええね、それ！あたしもしばらく青子ちゃんと会ってへんかったし・・・」

「俺もええで！その方がオモロイやんけ！」

「わあーったよ。俺、快斗に電話すつから青子ちゃんと園子頼んだぞ」

「うん！！」

『もしもし？新一？』

「今から俺ん家来れるか？」

『へ？いけるけど・・・』

「いやー。今、蘭と服部と和葉ちゃんがいてよ、蘭が快斗と青子ちゃん・園子も誘おうと言ってよー」

『ちょーどいいや！俺、実は今から新一ん家でも行こっかなーと
思っでてよ。んじゃ行くわー』

「了ー解」

「あ、もしもし？青子ちゃん？」

『蘭ちゃん？どうしたの？』

「いや、今から何か予定ある？」

『え？・・・ないよ。どうして？』

「じゃあ新一ん家来ない？今、新一と和葉ちゃんと服部君が居るから」

『分かったー。すぐ行くねー。じゃあね！』

「うん！後でねー！」

次は園子

園子もすぐに来ると言う返事がきた。

「青子ちゃんと園子来るって!!」

「快斗も来るってよ」

「・・・ああー!!」

「どないしたん？蘭ちゃん」

「白馬君にも連絡いれよーよ」

「ああ・・・白馬はイギリスに帰るとよ」

「帰るて・・・自分日本人ちゃうんか・・・」

「知るか！そう言ってたんだよ」

それから30分後・・・

「やっほー！新一く平次く」

まず最初に来たのは快斗。

「おじゃましまーす!!」

その次に園子が来て、

「久しぶりー。この間のクリスマスパーティー行けなくてごめんね」

最後に来たのは青子。

それからが大変だった・
・
・

快斗がマジックをやり始め・・・

蘭と和葉・園子は素直に賞賛し、

新一と平次はタネを解き明かそうと必死になっている。

青子は・・・

いつもの態度のフリをしていた。

もう、青子の瞳は何も映していなかった。

今まで大好きだった快斗のマジックでさえ・・・

今は何とも思わない・・・。

（どうしてだろうね・・・。今はすごいとも思わないや・・・。）

しかし、そんなことがバレたら厄介なので青子はいつも通り驚いて歓声をあげているフリをした。

（ここに居る人は皆鋭い。一瞬でも氣い抜いちゃうとバレちゃう
そうだよ・・・）

・
・
しかし、誰も青子の重いには気づかずに時間だけが過ぎていく・

・
・
そして長かったようで短かった一年も残り30分になっていた・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8055z/>

明日を願って

2012年1月1日21時51分発行